

教 育 研 究 業 績 書		
令和5年 5月 10日		
氏 名 廣 田 薫 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キー ワード	
作業療法分野	精神障害 BACS-J 作業療法 ストレス 対人交流 唾液アミラーゼ	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) グループ・ディスカッション	平成29年4月～現在に至る	国家試験対策として学生をいくつかのグループに分け、分野にわかれた資料（国家試験の過去問）を配布し2週間勉強させ、小テストを行った。2週間の間の1週間は資料を見ながら各自で解らないことを勉強し、1週間は各グループでディスカッションを行わせた。グループにはリーダーとなる成績上位者を配置しておく。成績上位者はディスカッションの進行役とする。ディスカッションは、リーダー以外で配布した国家試験の過去問の解説をするように行った。リーダーはその解説が正しいかを判断し、誤っている場合は解説している学生に質問・解説するように指導した。
2) 国家試験対策	平成30年4月～現在に至る	リハナビを使用した学習の仕方を指導した。国家試験対策で購入した本で勉強した分野をリハナビで20～50問解くように指導した。
3) 症例検討	令和2年4月～現在に至る	精神障害の治療学で、患者の障害像が具体化できるように模擬症例を作成し、学生に検討させた。検討は、障害像が具体化できるように個人とグループで実施し、わからないことは学生自身で調べたり、担当教員に質問する形をとった。模擬症例は、基本情報、OT 評価結果、問題点、目標、予後予測、治療プログラム、介入経過等に分割し、検討した後に参考資料として配布した。
2 作成した教科書、教材		
1) 講義資料（作業療法治療学V・VII）	平成24年4月～現在に至る	作業療法治療学の講義資料とスライドを作成した。毎年最新の情報となるようスライドを編集している。学生が障害をイメージしやすいよう画像を取り入れるようにしている。 障害のイメージしやすいよう模擬症例を作成し、学生同士でディスカッションできるようにした。
2) 体験型授業の導入	平成27年9月～令和元年10月まで	体験前に精神科病院で3時間程度の病院説明を行った。1日体験では、精神科病院で入

3) 臨床実技試験（模擬症例の提示）	令和元年 5 月	<p>院している精神障害との面接・行動観察の実践を行った。2～3 つのグループに分かれ、各プログラムに参加している患者と 10 分程度関わってもらい、観察を行った。体験後は、質問を受ける時間を設け、わからないことに答えた。さらに後日、会話録としてレポートを提出した。</p> <p>作業療法学専攻 3 年生の実習前に臨床実技試験を行った。精神障害の模擬症例の 1 症例分を作成し、評価者の評価用紙を作成した。</p>
4) 学内実習（運営・模擬症例の提示・指導）	令和 2 年 7 月～現在に至る	<p>作業療法学専攻 3 年生の臨床実習が新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、実習が困難となったため学内実習（遠隔）となった。遠隔にて学内実習を行うスケジュール等を作成した。また、模擬症例（精神障害）を作成した。模擬症例の一般情報、初期評価、治療経過、最終評価を作成し、学生に提示した。また、実技として、精神科の治療場面を想定し、学生に観察の仕方や治療等を指導した。</p> <p>学生が模擬症例をイメージしやすいように指導・助言した。</p>
5) 合同ケースカンファレンス	令和 4 年 9 月 30 日・令和 4 年 10 月 7 日	理学療法学科・作業療法学科・歯科衛生学科・介護福祉科・看護学科で合同のケースカンファレンスとして模擬症例検討を行った。
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <p>1) 学生による授業アンケート結果における評価</p> <p>2) 学生による授業アンケート結果における評価</p> <p>3) 学生による授業アンケート結果における評価</p>	<p>平成 30 年 9 月</p> <p>平成 31 年 2 月</p> <p>令和 2 年 9 月</p>	<p>学生による授業アンケートで、担当している「作業療法学概論Ⅱ」、「日常生活活動学」、「作業学Ⅰ」、「作業学Ⅱ」の 5 段階評価で 8 割以上の学生が 4 か 5 を選択しており、高い評価を得ている。</p> <p>学生による授業アンケートで、担当している「作業療法治療学Ⅶ（精神障害）」、「作業療法評価演習」、「作業療法評価概論」の 5 段階評価で 8 割以上の学生が 4 か 5 を選択しており、高い評価を得ている。</p> <p>「作業療法管理学」、「日常生活活動学」、「作業学Ⅰ」、「作業学Ⅱ」の授業アンケートで 5 段階評価のうち 4 か 5 を選択している。</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>1) 臨床実習指導実績</p>	平成 7 年 1 月～平成 19 年 3 月	<p>精神病院、介護老人保健施設において臨床実習を受け入れた。専門学校愛知医療学院、藤田保健衛生大学リハビリテーション専門学校、河崎医療技術専門学校、関西学研医療福祉学院、横浜リハビリテーション専門学校、ユマニテク医療専門学校、日本医療福祉専門学校、豊田学園医療福祉専門学校と多数の教育機関から臨床実習を受け入れた。患者との関わり方や全体像の捉え</p>

		方、治療計画などを指導した。
2) 卒業論文作成指導	平成 24 年 4 月～令和 3 年 3 月	座学と実技の唾液によるストレス反応：環境の違いでストレスに差が生じるかの検証をした。座学では監視状況の中での勉強でストレスが上昇した。実技では私語禁止であったためストレスが上昇したが、体を動かすことによりストレス解消となる。カフェイン入りコーヒーの接種が計算作業で野作業効率に及ぼす影響：カフェイン入りコーヒーとカフェインレスコーヒーを接種した後の作業効率と唾液中アマラーゼ活性の変化を検証した。
3) 学生委員会	平成 24 年 4 月から令和 3 年 3 月	学生指導やクラブ活動等の指導を行った。自治会を担当し、学生教員会議等の調整や自治会のあり方等を学生に指導した。
4) 実習委員会	平成 28 年 4 月～令和 3 年 3 月	臨床実習指導者会議の調整や役割分担、実習に関わる資料（確認書・承諾書等）の作成を行っている。また新規施設の実習依頼の書類作成と委員会への提出・承認を行っている。
5) 岐阜県立大垣桜高等学校福祉科講習講師	平成 28 年 5 月 2 日	福祉科の生徒に対し、リハビリテーションの概要について説明し、理学療法・作業療法の違いを説明した。
6) 企業家庭内教育研修 講師	平成 28 年 10 月 23 日	岐阜県環境生活部環境生活政策課生涯学習係より活動の指導「体力年齢を知ろう!」の依頼を受けた。活動内容は上体起こし、腕立伏臥腕屈伸、握力、2 ステップテストを行い、足型、足把持測定、バランス検査をした。その後体力年齢を算出し、今後の生活習慣について助言した。
7) 企業家庭内教育研修 講師	平成 29 年 10 月 15 日	岐阜県環境生活部環境生活政策課生涯学習係より活動の指導「体力年齢を知ろう!」の依頼を受けた。活動内容は上体起こし、腕立伏臥腕屈伸、握力、2 ステップテストを行い、足型、足把持測定、バランス検査をした。その後体力年齢を算出し、今後の生活習慣について助言した。
8) 企業家庭内教育研修 講師	平成 30 年 9 月 16 日	岐阜県環境生活部環境生活政策課生涯学習係より活動の指導「体力年齢を知ろう!」の依頼を受けた。活動内容は上体起こし、腕立伏臥腕屈伸、握力、2 ステップテストを行い、足型、足把持測定、バランス検査をした。その後体力年齢を算出し、今後の生活習慣について助言した。
9) 作業療法士臨床実習指導者研修	平成 30 年 10 月 1 日	理学療法士作業療法士養成施設指定規則にて臨床実習の質の向上を図るため、養成施設は実習調整者を 1 名配置するとしており、その要件に臨床実習指導者研修を修了している者とされている。
10) 鶉公民館健康講座 講師	令和元年 9 月 5 日	岐阜市より健康講座の講師の依頼があり、「ストレスと健康」の講義を地域住民に対して行い、今後の生活習慣について助言し

11) いい街つくろう境川支え合いの会	令和元年 9 月 4 日	本学教員と本学周辺地域住民、地域包括ケアセンターの職員、認知症カフェ職員等で街づくりについて話し合いを行った。
12) 企業家庭内教育研修 講師	令和元年 9 月 7 日	岐阜県環境生活部環境生活政策課生涯学習係より活動の指導「体力年齢を知ろう!」の依頼を受けた。活動内容は上体起こし、腕立伏臥腕屈伸、握力、2 ステップテストを行い、足型、足把持測定、バランス検査をした。その後体力年齢を算出し、今後の生活習慣について助言した。
13) いい街つくろう境川支え合いの会	令和元年 11 月 12 日	本学教員と本学周辺地域住民、地域包括ケアセンターの職員、認知症カフェ職員等で街づくりについて話し合いを行った。(地域住民が本学に望むこと等)
14) いい街つくろう境川支え合いの会	令和 2 年 2 月 28 日	本学教員と本学周辺地域住民、地域包括ケアセンターの職員、認知症カフェ職員等で街づくりについて話し合いを行った。(地域住民が本学に望むこと等)
15) 入試委員会	令和 2 年 4 月 1 日 ～現在に至る	入学者選考の方法、入学者選考の実施、専攻による入学可否判定原案の作成等の検討・調整した。
16) 自己点検委員会	令和 2 年 4 月 1 日 ～現在に至る	自己点検・評価の実実施計画、実施体制、活用に関する事を検討した。
17) 運営委員会組織学生委員会	令和 2 年 4 月 1 日 ～現在に至る	学生指導の理念と方針、クラブ活動等の学生の諸活動の推進・指導、学生の保険及び安全、学生の奨学金等、学生の懲罰等に関する事項を検討した。
18) いい街つくろう境川支え合いの会	令和 2 年 8 月 24 日	本学教員と本学周辺地域住民、地域包括ケアセンターの職員、認知症カフェ職員等で街づくりについて話し合いを行った。(地域住民が本学に望むこと等)
5 その他 RUN 伴+みずほ 2018 ボランティア RUN 伴+瑞穂実行委員主催	平成 30 年 11 月 4 日	認知症の方や障害者、地域の方等と一緒に歩きや車椅子でたすきリレーを行う。認知症の知識の共有や地域でサポートしあえる安心な町作りをサポートする。たすき(想い)をつなぐまちづくりをコンセプトに「認知症を知る」きっかけのひとつのイベント。ボランティア・サポートとして学生と参加。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 作業療法士免許証 生活行為向上マネジメント研修修了証 地域包括ケア推進リーダー導入研修修了証書	平成 7 年 5 月 8 日 平成 27 年 7 月 5 日 平成 28 年 12 月 4 日	第 17030 号 No. 基 4780 講習科目：包括ケアシステムについて 他

介護予防推進リーダー導入研修 研修修了証書 認知症アップデート研修会 研究倫理 e ラーニングコース 作業療法士臨床実習指導者研修 修了証	平成 29 年 10 月 8 日 平成 30 年 7 月 22 日 平成 30 年 8 月 7 日 平成 30 年 10 月 1 日	講習科目：介護予防事業に関連する行政組織・関連団体と福祉計画 他 最新の認知症の障害やアセスメントとマネジメントについて聴講した。また認知症看護認定看護師について聴講した。 インターネットにて研究倫理の 2 時間ほどのスライドにて勉強し、倫理に関する問題に回答した 認定番号 1638 号
理学療法士作業療法士専任教員養成講習修了証書	令和 5 年 2 月 22 日	第 20232082 号
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 南勢病院 2) 介護老人保健施設蛭 3) 介護老人保健施設なごみの里 4) 介護予防型地域ケア個別会議 5) 介護予防型地域ケア個別会議	平成 7 年 4 月～平成 15 年 9 月 平成 15 年 11 月～平成 17 年 4 月 平成 17 年 5 月～平成 19 年 3 月 令和元年 7 月 11 日 令和 3 年 2 月 19 日	南勢病院において急性期から「維持期の精神科作業療法に従事した。新人や助手の教育、後輩教育で臨床実習を多数の学校から受けていた。 介護老人保健施設において高齢入所者と通所者の作業療法に従事した。 介護老人保健施設において高齢入所者、特に認知症の作業療法に従事した。 岐南町役場より、介護予防型地域ケア個別会議への参加について依頼があり出席した。一人の症例に対し、作業療法士として助言を行った。 介護予防型地域ケア個別会議への参加について依頼があり出席した。2 人の症例に対し、作業療法士として助言を行った。
4 その他		
1) 現職者選択研修会 老年期障害講師	平成 28 年 9 月	岐阜県作業療法士会に所属している会員（作業療法士）へ老年期の基礎知識の講義を行った。
2) 現職者選択研修会 老年期障害講師	平成 29 年 10 月	岐阜県作業療法士会に所属している会員（作業療法士）へ老年期の基礎知識の講義を行った。
3) 全国リハビリテーション学校協会東海ブロック会教育部研修会	平成 29 年 12 月	最近の大学生への特徴と対応について講義を聴講した。大人の発達障害への対応や経験について演習を行った。
4) 認定作業療法士取得研修 共通研修（管理運営）	平成 30 年 11 月 24 日～25 日	認定作業療法士に求められる職場での管理職としての意識を持つようになる。第三者評価のように職場の状況を評価することの意味を理解する。協会（士会）の活動目標を理解して、業務管理に役立てることがで

5) 認定作業療法士取得研修 選択研修 (精神障害の OT)	令和元年 8 月 17 日 ～18 日	きる。 臨床における指導者の育成を目的に、講義・事例検討・グループ演習等を通して、急性期～維持期における作業療法課題を明らかにし、アセスメント、面接技法、心理教育、退院促進、チームアプローチ等の実践力の向上を図る。
6) 認定作業療法士取得研修 共通研修 (教育法)	令和元年 9 月 21 日 ～22 日	認定作業療法士に必要な臨床実践の質の維持・向上を目指す。臨床実習(教育)における教育目標について理解する。臨床実習指導時の教育目標について具体的に設定できるようにする。
7) 現職者選択研修会 老年期障害講師	令和 2 年 2 月	岐阜県作業療法士会に所属している会員(作業療法士)へ老年期の基礎知識の講義を行った。
8) 公認心理師現任者講習会	令和 2 年 10 月 21 日 ～12 月 31 日	公認心理師の国家試験を受験するため、公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンターが主催する講義をオンラインにて受講した。
8) 臨床実習指導者講習 講師・ファシリテーター	令和 2 年 12 月 19 日 ～20 日	臨床実習の指導が行える作業療法士は 5 年以上の経験年数とともに本講習会の受講が必要となった。それに伴い講習会を受けた作業療法士が講習会の講師とファシリテーターを務めることができる。作業療法臨床実習指導者の養成と CCS(臨床クラクシップ)の指導を行った。
9) 臨床実習指導者講習 講師・ファシリテーター	令和 3 年 1 月 9 日 ～10 日	臨床実習の指導が行える作業療法士は 5 年以上の経験年数とともに本講習会の受講が必要となった。それに伴い講習会を受けた作業療法士が講習会の講師とファシリテーターを務めることができる。作業療法臨床実習指導者の養成と CCS(臨床クラクシップ)の指導を行った。
10) 臨床実習指導者講習 運営	令和 3 年 7 月 10 日 ～11 日	臨床実習の指導が行える作業療法士は 5 年以上の経験年数とともに本講習会の受講が必要となった。講習会を開催する際の運営として参加者のチェックや講師・ファシリテーターの困難事項への対応等を行った。
11) 臨床実習指導者講習 講師	令和 5 年 1 月 21 日 ～22 日	臨床実習の指導が行える作業療法士は 5 年以上の経験年数とともに本講習会の受講が

12) 理学療法士作業療法士専任教員養成講習会

令和4年12月5日～令和5年2月22日

必要となった。講習会を開催する際の運営として参加者のチェックや講師・ファシリテーターの困難事項への対応等を行った。

指定規則変更に伴い専任教員養成講習の受講が必要となったため受講した。本講習会は、指定規則の書いての理由から教員の素質・技術向上に関する講義・演習が1日7コマ行われた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) なし				
(学術論文) 1 精神病院開放病棟入院患者の作業療法に対する理解 (査読付)	共著	平成9年5月	作業療法 16 巻	精神科作業療法を開設した際の開設準備週に OT の認識・理解を調査した。OT を聴いたことがあるもしくは知っているという患者が多く、OT に自分なりのイメージを持っていた。看護や心理士などによるグループ活動が OT イメージに結びついていると思われる。 P. 229 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：中島美奈子、森下加子、 <u>広田薫</u> 、井神隆憲、美和千尋
2 精神病院入院患者の入院生活援助を考える (査読付)	共著	平成10年3月	名古屋大学医療技術短期大学部紀要第 10 巻	開放病棟入院患者を対象に、自由時間の過ごし方、外出・泊の状況を調査した。調査結果は、入院中の自由時間の過ごし方は何もしないが多く、健常者と有意差があった。外出する者は多いが行動範囲が狭く、外泊は対象者の 10% で外泊先は自宅であった。結果から対人関係機能や生活規律能力などの社会性の獲得が必要であり、対策としては多彩な活動種目の準備を行い、経験を積ませる必要がある。外出する者は近隣での催し物などの情報提供がされるべきである。外出・外泊のない者は家族との交流の有無が課題で家族への介入が必要である。 P. 21~26 本人担当部分：データ収集 共著者：井神隆憲、 <u>広田薫</u> 、中島美奈子、森下加子、清水英樹、美和千尋
3 2 種類のスプリントによる治療報告母指拘縮改善の経過 (査読付)	共著	平成22年3月	岐阜県作業療法 VOL. 13	母指の MP 関節拘縮に対して Capener 改良型母指屈曲スプリント(初期提供) と牽引調節装置付きアウトリガー型スプリント(後期提供) の 2 種類のスプリントを作成し、それぞれ違う器官に装着した。それぞれ、処方してから短期間に可動域の改善がみられた。通院・受診の回数などの治療経過によって、効果の見極めが遅れた。効果の低迷を早期に把握することの重要性を再確認した。 P. 11~16 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：廣渡洋史、宇佐美知子、 <u>廣田薫</u> 、齋藤清貴、中根英喜
4 作業療法士間の交流活動と作業療法	共著	平成22年3月	岐阜県作業療法 VOL. 13	日本作業療法士協会が掲げる過去 5 年間の主要目標中に「福祉用具適用技能の向

<p>の啓発コンテスト 開催経験より (査読付)</p>				<p>上」「作業療法の啓発」が幾度か掲げられている。また、東海北陸作業療法学会の大ごみの一つとして、日頃顔を合わせる事のない療法士間の交流活動があげられる。今回、大 8 回東海北陸作業療法学会で「集まれ小さなアイデア!広がれ智慧の和!」と題した自助具・スプリント・治療器具コンテストの企画運営を通して、これらについて若干の治験を得たので、実施内容を報告する。</p>
<p>5 座位姿勢計測用ソフト rysis を使用した矢状面骨盤傾斜角の代替測定法の予備的検討ー客観的な座位姿勢評価法の臨床活用に向けて (査読付)</p>	<p>共 著</p>	<p>平成23年11月</p>	<p>第7回シーティングコンサルティングコンサルタント・シンポジウム</p>	<p>P. 41~43 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：宇佐美知子、齊藤清貴、中根英喜、<u>廣田薫</u>、廣渡洋史</p> <p>シーティングの代替測定法の方法を考案し、その結果と課題を報告した。従来の測定法と代替測定法による測定法の IOC は高い相関を認めた。矢状面骨盤傾斜角の平均値の従来の方法と代替測定法の測定値間で有意な差を認めた。代替測定法の有用性を示唆された。測定手順において従来の方法では指示棒が当てられなかったが、代替測定法では測定可能であった。代替測定法車椅子乗車して状態で測定可能である。</p>
<p>6 人格特性とストレス対処能力が介助ストレスに及ぼす影響と唾液中のバイオマーカーによるストレス評価 (修士論文) (査読付)</p>	<p>単 著</p>	<p>平成24年2月</p>	<p>九州保健福祉大学</p>	<p>P. 60~61 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：渡辺豊明、廣渡洋史、<u>廣田薫</u>、中根英喜、宇佐美知子、田上裕記、河野光伸</p> <p>ADL 介助負担感と人格とストレス対処能力との関係を調査した介護福祉士は、入浴介助が負担としてあげられた。さらに人格特性とストレス対処能力が低いと溜まった疲労感や負担感を処理できず、職員不足のため援助が求められないため精神的負担感を一層強めていると考えられた。コルチゾール濃度変動により、休日と比較すると勤務日の入浴介助に対して負担を感じている。また、勤務日と休日の起床時のコルチゾール濃度とアマラーゼ活性に有意差が認められないことから、休日の起床時がストレスの高い状態であることが示唆された。</p>
<p>7 治療用四肢装具の装着状況調査とコンプライアンス要因の検討 (査読付)</p>	<p>共 著</p>	<p>平成24年7月</p>	<p>日本義肢装具学会誌 28 巻</p>	<p>6 病院を対象に四肢装具の基本的情報と使用状況について調査し、コンプライアンス要因を検討した。対象者は、OTR と使用者、基本的情報を調査し、装具使用は VAS 評価を用いて調査した。対象者は外来患者が多く、矯正を目的とした装具が多かった。受傷から装具作製の期間は、目的が矯正 73.3±19.3 日、固定 10.3±12 日であった。装具使用は、OTR と患者ともに、「十分に装着をしている」が少なく、改善の余地がある。作業療法士と患者の VAS 値、入院と外来の</p>

8	片側ヒンジ型スプリント療法の試み (査読付)	共 著	平成27年11月	岐阜作業療法 VOL. 18	<p>VAS 値には差はなかった。 P. 166～168 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：廣渡洋史、小島誠、杉浦弘通、宇佐美知子、中根英喜、<u>廣田薫</u>、渡辺豊明、福本安甫</p> <p>中指基節骨骨頭橈側部の骨折後の岐関節で、岐関節部の骨吸収と間接可動制限、基節骨に対する中節骨長軸のアライメント不良となる恐れのある症例に対し、片側ヒンジ型スプリントを提供した。その結果、運動機能、握力ともに改善し、基節骨長軸に対する中節骨長軸の橈側への偏位も改善した。それに伴い、日常生活に不自由なく復帰する事ができた。本スプリントは、指の関節内骨折後岐関節の術後の症例に対し、簡便かつ安価で有効に作用すると考えられた。 P. 5～7 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：廣渡洋史、宇佐美知子、中根英喜、<u>廣田薫</u>、藤井稚也</p>
9	本学における学生の出身課程と実習前後における出身高校の課程の教科と文章に関する意識の調査 (査読付)	共 著	平成29年3月	岐阜作業療法 VOL. 19	<p>本学作業療法学専攻学生に対し、1年間週1回文章読解と文章作成の機会を設け、その出身高校の課程の形態と見学実習前後における出身高校の課程の教科、文章に関する意識をPT学生と比較して調査した。出身課程ではOT学生は文系が多く、実習後、「文系」、「出身課程に有利不利はない」と答える者が多かった。役立つ出身課程の教科では、OT学生の多くが国語を選択し、文章能力の必要性を感じている事が分かった。卒前教育の一環として文章作成の機会を増やす事が必要であると考えている。 P. 7～10 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：廣渡洋史、宇佐美知子、中根英喜、<u>廣田薫</u>、藤井稚也</p>
10	言語と握手を用いた異なる挨拶方法が対人距離に与える影響 (査読付)	共 著	平成29年3月	岐阜作業療法 VOL. 19	<p>対象者と信頼関係を築くための挨拶について、握手に焦点をあて、3種類の挨拶を実施し、その前後の対象者のモデルに対する対人距離を対照群と比較し検証した。その結果、挨拶を行うことでモデルとの対人距離が狭くなった。また、握手を伴う挨拶は時間に関わらず言語による挨拶よりモデルとの対人距離が狭くなった。これらより、挨拶が面識のない相手を判断する要因となることに加え、握手を伴う挨拶はモデルが表現する敬意・親愛の意を対象者は受け取りやすくなり、短時間で対象者の対人距離を狭くする手段として有効である。 P. 11～14 本人担当部分：共同研究につき抽出不可</p>

11 我が国の高齢者施設における標準型車いす調査の動向—過去10年の収載誌検索からの知見より— (査読付)	共 著	令和元年3月	岐阜作業療法 VOL. 20	<p>能 共著者：宇佐美知子、藤井稚也、廣渡洋史、<u>廣田薫</u>、中根英喜</p> <p>車いすの現在までの変遷、過去 10 年間における文献データベースによる動向を調査・報告する。検索の結果、抽出文献では、限局したパーツとの適合調査が多く、快適性を追求して自動車用シートを扱う間接的調査もあり、抽出・分類した文献が、車いすの適合を目指した調査・研究であった。高齢者施設の車椅子のハード・ソフトで進歩がみられず課題は山積みである。また使用者側と専門職の間に車いすに対する意識の乖離が推測される。これらについて車椅子の研究課題として捉え、今後、調査を実施する必要がある。</p> <p>P. 41～47 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：廣渡洋史、森崎直子、藤井稚也、宇佐美知子、<u>廣田薫</u>、中根英喜、幸福秀和</p>
12 学生の臨床実習における意欲・動機と対人交流の態度の特徴 (査読付)	共 著	令和元年4月	岐阜保健短期大学紀要	<p>対象は在学する 20 名とした。臨床実習前後に EAS と BIS/BAS を調査した。臨床実習前後における EAS 各カテゴリー得点と BIS/BAS 得点のクラスター分析を検討し、臨床実習前後のクラスター 1・2 の有意性を判定した。学生を指導・教育する際には、ポジティブな出来事となる情報を多く与え、学生との交流を図り、臨床実習や講義に対し、ネガティブな感情を抱かないように配慮する必要がある。</p> <p>P. 118～125 本人担当部分：データ収集、論文作成等 共著者：<u>廣田薫</u>、宇佐美知子、中根英喜、藤井稚也、廣渡洋史</p>
13 岐阜県における災害リハの構築 (査読付)	共 著	令和元年4月	岐阜保健短期大学紀要	<p>岐阜県における大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会の体制について、その体制の誕生と現在までの経緯について記した。また、2 回の派遣実績を通して、過去の体制の見直しを行い、体制の強化とマニュアル改訂を行い、派遣要請後に迅速に対処できる体制の構築を行った。県との連携等、問題点は多岐にわたるが、「常に想定外であることを想定する」ことを念頭に、現在の体制のゴールはないと考え、常に再点検と構築を行う必要がある。</p> <p>P. 132～136 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：廣渡洋史、藤井稚也、宇佐美知子、<u>廣田薫</u>、中根英喜</p>
14 就労者の運動習	共 著	令和元年12月	岐阜県理学療法士会学術誌 24	就労者の運動習慣、身体活動量(PA)、座位行動(SB)が身体機能とどの程度関連し

<p>慣、身体活動量、座位行動と体力測定結果との関連性 (査読付)</p>			号	<p>ているのかを明らかにすることを目的に、企業就労者 45 名を対象に、質問紙調査と体力測定(腕立て伏せ、上体起こし、2 ステップテスト、握力、ファンクショナルリーチ<FR>、足把持力)を行った。その結果、運動習慣のある者は約 24%と少なかった。また、PA と上体起こし、握力、FR、足把持力との間に有意な正の相関を認めたが、SB との間には有意な関連項目はみられなかった。 P. 47~52 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：小池孝康、宇佐美知子、藤井稚也、小島誠、廣渡洋史、松井一久、池田雅志、岩島隆、<u>廣田薫</u>、中根英喜、小久保晃</p>
<p>15 本学在学生の自我構造と臨床実習前後におけるストレス対処行動について (査読付)</p>	共 著	令和元年12月	岐阜県理学療法士会学術誌 24号	<p>本学学生の自我構造と臨床実習前後におけるストレス対処行動を明らかにすることを目的に、1 年生 40 名を対象に、臨床実習 I(見学)前後に自己成長エゴグラムと対処行動エゴグラムを実施した。その結果、自己成長エゴグラムでは実習前後とも NP と FC が高く、対処行動エゴグラムでは実習前には f-FC、実習後には f-A が高い結果となった。これらの結果から、臨床実習を通して責任感や義務感が強くなり、客観的・理性的にも判断するようになったことで、疾患や境遇に対しての共感性がもてるようになったと考えられた。 P. 83~87 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：岩島隆、池田雅志、小池孝康、小久保晃、松井一久、小島誠、宇佐美知子、<u>廣田薫</u></p>
<p>16 母指対立動作時の手指の動きとその評価 (査読付)</p>	共 著	令和元年1月	岐阜保健大学紀要 第 1 号(創刊号)	<p>母指対立動作の角度の計測方法は、「母指先端と小式部との距離で計測する」方法がある。このように臨床現場では母指 CM 関節だけでなく母指の MP 関節、IP 関節を含めた動きとして評価しているが、母指 CM 関節の治療、訓練を行うには、母指 CM 関節の正確な動きを知ることが重要と考えられる。そこで電子核時計を使用し、対立時の母指 MP・IP 関節の屈曲角度、対立指 MP・PIP・DIP 関節の屈曲角度、母指 CM 関節の対立角度、環指・小指 CM 関節の屈曲角度を計測した。結果、母指対立動作時に手指の各関節角度には一定の規則性があること、対立動作が小指側となるにつれ環指・小指の CM 関節屈曲角度の増加、母指 CM 関節、母指 MP 関節の屈曲角度の増加、母指 IP 関節の一定の規則性を確認した。母指対立動作時の母指対立動作時の母指対立対象指の相対的角度において、示指から小指の CM 関節よりも母指の CM 関節の対立角度の方が大きく、男女差はな</p>

<p>17 壮年期・中年期の身体機能と運動行動の変容段階との相違点 (査読付)</p>	<p>共 著</p>	<p>令和2年1月</p>	<p>岐阜保健大学紀要 第1号(創刊号)</p>	<p>かった。 P. 77～82 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：廣渡洋史、浅井麻衣、中根英喜、廣田薫、宇佐美知子、藤井稚也</p> <p>壮中年期の身体機能と運動行動の変容段階及び主観的健康観について比較した。身体機能として、上体起こし、腕立伏臥腕屈伸、2 ステップテスト、ファンクショナルリーチテスト、握力、足趾把持力を計測した。運動行動の変容段階と主観的健康感アンケートにて聞き取りした。身体機能成績と年齢、身体機能と運動行動の変容段階、身体機能と主観的健康観をそれぞれ比較したが、3 群間で違いはみられなかった。壮中年期は主観的健康観が高く身体機能の低下を感じるものが少ないため、身体機能の状態の違いで運動行動の変容段階に差がなかったのではないかと考える。</p> <p>P. 99～104 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：宇佐美知子、小池孝康、藤井稚也、池田雅志、廣田薫、中根英喜、岩島隆、小島誠、廣渡洋史</p>
<p>18 臨床実習におけるストレス・コーピングについての検討 (査読付)</p>	<p>共 著</p>	<p>令和2年1月</p>	<p>岐阜保健大学紀要 第1号(創刊号)</p>	<p>臨床実習におけるストレスに対する適応と臨床実習前の学生の特徴について明らかにする。[対象と方法] 対象は学生 33 名とした。ラザル式ストレス・コーピング・インベントリー (Lazarus Type Stress Coping Inventory ; SCI) を臨床実習前後に実施し対処方法と対処型を解明し比較した。[結果] 臨床実習前は Pos が高い。臨床実習前後で Esc 得点のみが低下した。学生のストレス対処の稚拙さとストレスフルな状況を経験することが少ない。臨床実習が学生にとってストレスが高い状況である。しかし、見学実習の経験を得て学生のストレス対処能力を向上させることが示唆された。</p> <p>P. 160～162 本人担当部分：データ収集、論文作成等 共著者：廣田薫 宇佐美知子 中根英喜 藤井稚也 小久保晃 池田雅志 廣渡洋史</p>
<p>19 作業療法教育における早期体験学習の導入とその考察 (査読付)</p>	<p>共 著</p>	<p>令和2年1月</p>	<p>岐阜保健大学紀要 第1号(創刊号)</p>	<p>本学の作業療法学専攻では、作業療法学(以下、OT)教育における早期体験学習(Early Exposure 以下、EE)の報告は数少ないものの、同世代で医療の資格取得を志す若者に対する EE は有効であると考え、2016 年度より介護福祉分野と OT 分野に関連した EE を導入した。その結果、学生の作業療法士になろうという顕著な意欲の結果が得られ、EE が今後の学内における学習と学外での臨床実習の準備として大いに効果を発揮するも</p>

				のと予測された。 P. 163～165 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：中根英喜、廣渡洋史、 <u>廣田薫</u> 、宇佐美知子、藤井稚也
(その他)				
1 「学会発表」 精神病院開放病棟 入院患者の作業療 法に対する理解 (査読付)	—	平成9年6月	第 31 回日本作 業療法学会 (新潟市)	精神科作業療法を開設した際の開設準備 週に OT の認識・理解を調査した。OT を聴いたことがあるもしくは知っている という患者が多く、OT に自分なりのイ メージを持っていた。看護や心理士など によるグループ活動が OT イメージに結 びついていると思われる。 本人担当部分：データ収集 共著者：中島美奈子、森下加子、 <u>広田 薫</u> 、井神隆憲、美和千尋
2 「集まれ小さなア イデア！広がれ知 恵の輪！」を通し て (査読付)	—	平成21年11月	第 9 回東海北陸 作業療法学会 (金沢市)	第8回東海北陸作業療法学会で「集まれ 小さなアイデア!広がれ知恵の和!」と題 した自助具・スプリント・治療器具コン テストの企画運営を行ったので報告した 。自助具等の現物展示と説明ポスターに て発表形式をとった。学会のサブテーマ 「新しい交流が生まれる」から伺えるよ うに日ごろ顔を合わせる事のない療法士 間の意見交換等の交流活動がなされた。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可 能 共著者：宇佐美知子、齊藤清貴、中根英 喜、 <u>廣田薫</u> 、廣渡洋史、小島誠
3 トイレ動作時の着 衣動作が立ち上が り動作へ及ぼす影 響 (査読付)	—	平成22年5月	第 14 回岐阜県 作業療法学会 (大垣市)	立ち上がり動作と着衣動作を行いながら の立ち上がり動作を検討した。対象者は 10名であった。平行機能、下肢加重計に 立ち上がり動作とトイレ動作時の下位着 脱動作を行いながらの立ち上がりを1/10 0sのスケールで前後左右の重心移動、足 底面、座面の加重変化で比較した。ボト ム値では通常の立ち上がり動作において 加重が少なく、ピーク値では立ち上がり 動作において加重が加わった。トイレ動 作時の立ち上がり動作ではおむつを臀部 へ引き上げながらの立ち上がり動作を行 い手部は体側を沿いながらおむつを引き 上げていたためと考える。 本人担当部分：データ収集 共著者：宇佐美知子、廣渡洋史、小島誠 、 <u>廣田薫</u> 、中根英喜
4 作業療法養成課程	—	平成22年6月	第 44 回日本作 業療法学会	養成課程期間において「障がい」に対す

<p>が「障害のイメージ」に与える影響 (査読付)</p>			<p>業療法学会 (仙台市)</p>	<p>るイメージの変化をICFに基づき形式化し、作業療法学生と理学療法学生を比較した。作業療法臨床実習で対象を捉えるにあたり、個人因子への配慮が重要である。学内過程の学習目標として個人因子を評価できる視野の会得が必要である。 本人担当部分：データ収集 共著者：宇佐美知子、齋藤清貴、中根英喜、<u>廣田薫</u>、廣渡洋史</p>
<p>5 簡単な glove Splint による治療効果報告</p>	<p>—</p>	<p>平成22年10月</p>	<p>第 26 回日本義肢装具学会 (川越市)</p>	<p>両側性ともに手指に著明な拘縮を呈している強皮症の患者に対して、軍手を利用したスプリント療法をする機会を得た。本スプリントを提供してから約 1 年で他動関節可動域と自動関節可動域が大きく改善し、握力も増加した。それとともに、日常生活での手の使用頻度も増えた。強皮症独特の手の冷えに対しても効果があり、また、軍手という機能特性によって、両側ともに不自由な手を使用し患者自身が装着することで、自宅での装着が増え、良い結果となったと考察した。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可 共著者：廣渡洋史、渡辺豊明、小島誠、池田雅志、中根英喜、宇佐美知子、<u>廣田薫</u>、岩島隆、河野光伸、福本安甫</p>
<p>6 客観的臨床能力試験 (OSCE) の採点における理学・作業療法 (PT・OT) 専攻の類似点 (査読付)</p>	<p>—</p>	<p>平成23年10月</p>	<p>第 27 回東海北陸理学療法学会 (富山市)</p>	<p>複数課題のOSCEを実習前後で実施し、採点差が生じるOSCE項目がみられ、Mann-WhitneyのU検定を用い、有意差があった項目を技術と接遇・態度項目で検討した。2つの評価課題があると検者の位置で評価が変化する、接遇・態度は声の明瞭度や仕草・表情などで有意差があった。OSCEは学生が自分の成長が分かり易い評価が妥当で有ると考える。評価者間の評価基準を確認するために模擬患者と評価者が話し合う時間を設けることで評価者間の差が生じ難くなり、学生に明確なフィードバックとなる。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：池田雅志、小島誠、岩島隆、廣渡洋史、中根英喜、<u>廣田薫</u>、宇佐美知子、村瀬優、櫻井宏明、金田嘉清</p>
<p>7 座位姿勢計測用ソフトウェアを使用した矢状面骨盤傾斜角の代替測定法の予備的検討—客観的な座位姿勢評価法の臨床活用に向</p>	<p>—</p>	<p>平成23年11月</p>	<p>第7回シーティングコンサルタント・シンポジウム (東京都文京区)</p>	<p>シーティングの代替測定法の方法を考案し、その結果と課題を報告した。従来の測定法と代替測定法による測定法のIOCは高い相関を認めた。矢状面骨盤傾斜角の平均値の従来の方法と代替測定法の測定値間で有意な差を認めた。代替測定法の有用性を示唆された。測定手順に</p>

	けて (査読付)			において従来の方法では指示棒が当てられなかったが、代替測定法では測定可能であった。代替測定法車椅子乗車して状態で測定可能である。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：渡辺豊明、廣渡洋史、 <u>廣田薫</u> 、中根英喜、宇佐美知子、田上裕記、河野光伸
8	臨床見学実習を経験したリハビリテーション学科学生のストレス対処の変化 (査読付)	—	平成27年11月 第15回東海北陸作業療法学会 (岐阜市)	学外実習として初めて患者様等に接する機会である臨床見学実習を経験する事によりストレス対処能力がどのように変化されるかを検証した。その結果、見学実習においてストレス対処に稚拙さと見学実習以前よりストレスフルな状況を経験する事が少ない事が示唆された。また見学実習の経験がストレス対処能力を向上させる事が示唆された。 本人担当部分：データ収集、抄録作成、学会発表等 共著者： <u>廣田薫</u> 、宇佐美知子、中根英喜、藤井稚也、小久保晃、池田雅志、廣渡洋史
9	本学学生の出身課程の調査と見学実習前後の教科と文章に関する意識の調査 (査読付)	—	平成27年11月 第15回東海北陸作業療法学会 (岐阜市)	OT学生に対し、入学後に授業と別に文章作成の機会を与え、他専攻学生と調査比較した。その結果、文章作成の機会や実習環境等によってOT学生の方が文章作成能力の必要性を感じている事が示唆された。そのため早期の段階での文章作成の機会を与える必要があると考えられる。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：廣渡洋史、宇佐美知子、 <u>廣田薫</u> 、中根英喜、藤井稚也、金田成九
10	挨拶方法の違いが対人距離に及ぼす影響 (査読付)	—	平成27年11月 第15回東海北陸作業療法学会 (岐阜市)	方法の異なる挨拶の前後で対人距離がどのように変化するかを検証した。その結果、言語による挨拶も握手による挨拶においても対人距離を短縮させる事により面識のない相手を判断する要因となっている。また握手による挨拶を行う事により親密度を増す可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集 共著者：宇佐美知子、藤井稚也、廣渡洋史、 <u>廣田薫</u> 、中根英喜
11	作業療法学における早期体験学習の	—	平成29年9月 第51回日本作業療法学会	本学の1年生にEEを導入した結果学生、関連施設、当事者からは好意的に受け入

<p>導入と課題 ポスター発表 (査読付)</p>			<p>(東京都千代田区)</p>	<p>れられる結果となった。特に途中退学者が出なかった点は教育効果として手応えを感じている。今後の課題としては未学習、未体験の1年生をEEで指導する施設側への配慮、品海に連絡を取りながら周到な準備に追われる教員の負担軽減、綿密な活動計画の企画と運用など継続的な努力を要する。 本人担当部分：データ収集 共著者：中根英喜、<u>廣田薫</u>、藤井稚也、廣渡洋史</p>
<p>12 学生が主体的に臨床実習目標を設定する、アクティブ・ラーニングの試み (査読付)</p>	<p>—</p>	<p>平成29年11月</p>	<p>第17回東海北陸作業療法学会 (愛知県名古屋)</p>	<p>臨床実習開始時に学生が、具体的な実習内容を持つため主体的な教育目標を立てる授業を試みた。対象は本学の作業療法学専攻1年生10名とした。実習開始前に目標課題の提示を行った。実習終了後にアンケート調査、目標設定から発表までの自己評価の回答を求めた。目標達成度と目標達成・発表への情報収集の結果から主体的な臨床実習となり目標に近付けた。自己評価の結果からも目標を持って臨床実習に挑み、主体的な臨床実習を行え、自信を持つことができた。学生自ら目標を持つコミュニケーションが生まれ、良好な関係が築ける。目標を持って臨床実習に挑むことで主体的に臨床実習が行え、具体的な目標になった。 本人担当部分：データ収集、抄録作成、学会発表 共著者：<u>廣田薫</u>、宇佐美知子、中根英喜、廣渡洋史、藤井稚也、原和子</p>
<p>13 作業療法士養成施設に在学する学生の対人関係の特徴 (査読付)</p>	<p>—</p>	<p>平成30年5月</p>	<p>第22回岐阜県作業療法学会 (岐阜県羽島市)</p>	<p>臨床実習において臨床実習指導者から指摘を受ける学生が多く、指導しても改善されないことがある。本研究は学生の対人関係における態度と行動を把握・特徴を明らかにした。その結果対人関係に好奇心があり心配りができる。ネガティブを感じると目標のための行動・努力が抑制されすいと示唆された。学生は好奇心旺盛でポジティブな時や冷静に努力しているときに対人関係は活発になるが、ネガティブを感じると対人関係のための行動を抑制する。学校教育においてポジティブ感情で指導が終了できる指導方法を検討する必要があると考える。 本人担当部分：データ収集、抄録作成、学会発表 共著者：<u>廣田薫</u>、宇佐美知子、藤井稚也、中根英喜、廣渡洋史</p>
<p>14 統合失調症認知機能簡易評価(BACS-)の結果と病棟の特徴・関連性</p>	<p>—</p>	<p>平成30年5月</p>	<p>第22回岐阜県作業療法学会 (羽島市)</p>	<p>当病院にBACS-Jを導入するにあたり、統合失調症患者の認知機能の特徴を把握し、関連性を明らかにした。閉鎖は、精神運動機能などが興奮状態での発言している。準開放は、興奮状態から脱し、自</p>

(査読付)				閉状態である。開放は、最低限の会話・行動となっている。作業により作業遂行能力を向上させ、注意と情報処理速度を高め、作業を行いながら言語的コミュニケーションを持つことにより言語性記憶と学習がなされ、ワーキング・メモリが向上する。各病棟の認知機能に合わせ、作業提供・会話を検討する必要がある。本人担当部分：データ処理、抄録作成、発表スライド作成の助言 共著者：羽田明莉、松江将宏、加藤純子、岡田純里、 <u>廣田薫</u>
15 本学在学生の自我構造と臨床実習前後におけるストレス対処行動について (査読付)	—	令和元年2月	第29回岐阜県理学療法学会 (各務原市)	臨床実習(見学)前後の自己成長エゴグラムと対処行動エゴグラムを調査し、実習前後の変化を検討した。結果は実習前後ともNPとCPが高いM型エゴグラムとなり、対処行動エゴグラムでは実習前には自己成長エゴグラムのFCとf-CPの相関がみられたが、実習後には相関がみられなくなった。学生が実習を通してストレス対処行動を感情の発散や気分転換で対処する機会がなかったと考える。 本人担当部分：抄録作成時の助言 共著者：岩島隆、宇佐美知子、 <u>廣田薫</u> 、小池孝康、池田雅志、小久保晃、松井一久、小島誠
16 本学在学生の自我構造と臨床実習前後におけるストレス対処行動について—見学実習と評価実習との比較— (査読付)	—	令和元年11月	第35回東海北陸理学療法学会(富山市)	見学実習前後と評価実習前後の自己成長エゴグラムと対処行動エゴグラムを比較した。自己成長エゴグラムでは評価実習後のAが低くなりFCが高い結果となった。また、対処行動エゴグラムでは見学実習と比較すると評価実習後のF-CP、f-NP、f-A、f-ACが高い結果となったが有意差はみられなかった。見学実習と比較すると評価実習では、困難にあって成長したことを喜ぶ対処や冷静に分析する対処や感情や衝動を抑える対処、人から援助や支えを求める対処、原因を自分自身に求める対処が長期の臨床実習を通して高くなったと考える。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可 共著者：岩島隆、池田雅志、松井一久、小池孝康、小久保晃、小島誠、 <u>廣田薫</u> 、宇佐美知子
17 診療参加型臨床実習における対人交流技能の変化 (査読付)	—	令和元年11月	第19回東海北陸作業療法学会 (浜松市)	評価実習前後のEASとBIS/BAS尺度を調査し、従来型とCCS型実習による変化と特徴を検討した。従来型の実習前は、理想が高く、マイペース、過保護的であったが、実習後には自分のできる事がわかり、客観的に物事を考え、社会人の自覚が現れた。CCS型実習の実習前は、マイペースで共感性に欠け、自己中心的であったが、実習後には責任感、社会人の自覚、親密な人間関係を築けるようになった。両実習ともに職業人の意識や社会性を身につけることができたと考える。CCS型実習は、SVの積極的な介入により学生とともに成長することで獲得された

<p>18 学内実習における 症例検討からの思 考過程の学び (査読付)</p>	<p>—</p>	<p>令和3年11月</p>	<p>第26回日本作業 療法教育学会 大会 (石川金沢市)</p>	<p>と考えられる。 本人担当部分：データ収集、抄録作成、 学会発表等 共著者：<u>廣田薫</u>、池田雅志、宇佐美知 子、中根英喜、藤井稚也、廣渡洋史</p> <p>オンラインによる模擬実習，臨床推論能 力の養成を目的とする症例検討学習を 実施したので報告する．1 週間 1 模擬症 例を 8 症例を検討した．可能な限り教員 が学生のグループ・ディスカッションに 加わり質疑応答を行った．その結果 8 症 例を検討することにより学生個人の基礎 知識の底上げとなり，臨床推論能力を育 てた．GD を学生や指導教員，別分野の 指導教員と行うことにより臨床推論を 聞く機会となった．今回の実習では， 実際の臨床を経験する機会とならな かったため基本的態度と臨床技能の 習得において今後の課題として検討 する必要がある． 本人担当部分：データ収集、抄録作成、 学会発表等 共著者：<u>廣田薫</u>、中根英喜、宇佐美 知子、高田政夫、原和子</p>
--	----------	----------------	---	---